

## 【 翻 訳 】

### 皇帝魚の二回目の災難

#### The Tonguefish's (Kingfish) Two Disasters

作者：鄭 清文

訳者：頼 振南

海に近い たんすいがわ 淡水河の河口で、ある とうさぎよ 鰯沙魚（河底の砂に隠れ棲む魚）と呼ばれるシタビラメが獲れる。鰯沙魚は体つきが比較的ひよろ長くて、牛の舌に似た形をしているが、普通のヒラメと比べると尾があるかどうかははっきりしないし、色もやや薄い。

鰯沙魚は、台湾で こうていぎよ 皇帝魚とも呼ばれている。聞くとところによると、頭部に皮膚病を患った大明皇帝洪武帝（朱元璋）がこの魚のあまりの美味しさに、片側を食べてから、繁殖のために再び生かせようと残った片側を河に放したという。一国の尊い君主の皇帝が「生かせ」と珍しく口を酸っぱくして言ったため、鰯沙魚は本当に復活し、その後代々子孫を繁殖してきた。これが「皇帝魚」と呼ばれる由来だ。

さて、あるところに金春発という男がいた。金春発の父は農民で、一甲（約一町、約2,934坪）あまりの農地を持っていた。都市が迅速に発展するにしたがって、その地価も急に高騰した。農地の値が上がっても、金春発の父は耕作を続けた。彼は父に田畑を換金して商売をさせてもらうよう頼み込んだが、父は金春発が言うことが農作業をしたくないことの口実だと分かっていたので

承知しなかった。実際、金春発はただ酒と女の二つのことしか頭になかった。

不幸にも、金春発の父は三年前に亡くなった。金春発は父の田畑を受け継いだ後、まずその一部を売り払って債務を全部完済し、さらに一戸建ての新しい家を建てた。しかし、彼を拘束してきた父の存在から解放されてからは、以前より一層酒と女にのめり込むようになってしまった。

そんなある日、一人の遠縁の爺さんがやってきて金春発に忠告した。しかし彼は、自分にはたとえまだこれから五十年生きて毎日十数万円ずつ使ったとしても有り余るほどの財産がある、と答えた。このときすでに四十歳の金春発は、まして自分があと五十年も生きられるかどうかさえ確信がなかったのだが。

遠縁の爺さんは「これはお前さん一人の事ではなく、お前さんの家族にかかわる事なのだから、少しは子孫のために考えたらどうなんだ！」と責めたてた。

しかし金春発は「親父のように一生苦労して少しも楽を味わわないまま世を去りたくない」と言い返した。また彼は「人間が一生に儲けたお金は使ってしまったお金で計算するんだ」と言い放った。

その姿に爺さんはもはや自分には金春発の気持ちを動かす術がないことを悟った。

裕福になってからの金春発はふだんから珍しいものを食べる癖が付いた。彼はフカヒレやツバメの巣はもとより、熊の掌と虎の肝臓さえも食べたことがあった。

皇帝魚という魚の名前を耳にしてからは、毎日それを食べることだけを考えて。彼はよく女房に皇帝魚を買ってくるように言ったが、その頃には淡水河の汚染によって、このような魚もますます取れにくくなっていた。

ある日、金春発の女房は本当に皇帝魚を一匹買って来た。彼女

はわざわざこの魚の料理の仕方まで魚屋に聞いて来た。この魚は蒸しても揚げても、どちらも美味しく食べられると言われたが、彼女は金春発がよく酒を飲むので揚げたほうがわりと彼の口に合うのではないかと考えた。

そしてその日の夕食には揚げた皇帝魚が食卓にならんだ。

「この魚のどこが皇帝なんだ」と金春発は大声で聞いた。

金春発の女房は、中部地方の田舎出身なので小学校さえも通っていないかった。金春発は普段からよく彼女に大声で怒鳴ったり殴ったりしたので彼女は彼をととても恐れ、このように彼に聞かれると、怖くてたまらなかった。この時もぶるぶる震えながらようやく「魚が皇帝なのではなくて、魚を食べる人こそ皇帝なのではないでしょうか」と答えた。

「そうか。とすれば俺は皇帝になったというわけか。ははは。今から私は皇帝じゃ。」

金春発は小さい時から地方劇を見るのが大好きだった。特に出番が少ないにもかかわらず、着るものも一番きれいで、いつも朝廷の大勢の文武官吏の前に座って皆にひざまずき額ずいて礼拝される皇帝の役が、彼は最も羨ましかった。

そんなことを言いながら金春発は腰も箸もまっすぐに伸ばして、皇帝魚の背中に最も肉のある部位から一塊を取って、口の中に放り込んだ。

「おい、この魚、どうやって料理したんだ?!」

「魚屋に聞いた通りに料理しました。」

「吐くほど不味いじゃないか! なにが皇帝魚だ、早く下げて捨てる!」

女房には、金春発の舌がますます肥えていくのが分かっていた。しかしすでに自分が以前、どのように魚を食べていたのかを忘れてしまうまでとは。どんなに肉のほんの少ししかない魚の頭でも、骨でも、求めてかじったり噛んだりしてその汁を最後まで味わっていた。時々、ちょっと油断して、小骨がのどに刺さってしまう

ほどだったのに。

しかし、金持ちになってから、夫の様子は完全に変わってしまった。この何ヶ月と言え、彼は一言も彼女が作った料理をおいしいと言ったことがない。もっと言えば、めったに家に帰って食事をしなくなっていた。彼が皇帝魚を食べたかったのも、皇帝という名前に執着した結果だろう。

女房は急いで料理を下げた。彼女の手はまだ小刻みに震え、もう少しでお皿を落とすところだった。

金春発は彼女に皇帝魚を捨てろと言った。しかし、丸一匹の魚のほんの一口しかとっていないのに、本当に惜しすぎる。彼女はようやくのことで探し当てたこの魚を自分はまだ食べていないので、とりあえず台所に下げておき、夫の留守中にゆっくり食べようと思った。

「ちょっと待て！」金春発は立ち上がった。その体はとても大きく見える。「あの魚、『皇帝魚』と言ったか？」

「はい。」

「皇帝が半分を食べた後、また河へ放して生き返らせてやったんだっただよな？」

「そう言われてますが。」

「なあ、お前には俺が皇帝に見えないか？」彼は並々と注いだ酒をぐっと飲み干して続けた。

「今俺が飲んでるのは洋酒、住んでるのは洋館、乗ってるのは外車だ。俺は金持ちだから、ほしいものなら手に入らないものはない、何をしても自由自在で、これでも昔の皇帝に及ばないか？」と言った。

彼は女房の目の前に近づいて、身振り手振り本当に皇帝の真似をし始めてしまった。

「よし、こうしよう。この魚は醜くて美味しくないが、俺はあいつを生かしてやりたい。おまえ、俺は皇帝なんだろう。俺はあいつを生かし、さらにはその子孫繁栄を望もうではないか。」

「はあ……」

「なあ、ちゃんと聞いているか？」

「も、もちろんです。」

「だったら、さっさとやれ」と彼は言って、更に杯にお酒をいっぱい注いで、頭を上に向けてぐっと飲み干した。

女房は皇帝魚を捧げ、台所に入って、頭を上げて壁に祭っている土地神を見た。金春発は彼女に土地神以外の神様を祭らせなかった。彼が幼く、この辺りもまだ一面の野原だったある日の日没、金春発は林の中で道に迷ってしまい、出てこられなかった。あれは魑魅魍魎の仕業だったに違いないと言う人もいたが、迷いに迷ったその時に、彼は遠い所に少し赤く光っている明かりに気がつき、その赤い明かりをひたすら見つめながら歩いていったところ、やっと林を出てこられたという。その赤い明かりこそ、土地神を祭る社の中の香炉から出た線香の火で、それ以来金春発は土地神だけを祭ってきたのだ。

女房は皇帝魚を土地神の前に置いて、一心に願った。

「土地神様、ぜひ私を助けてください。この魚を再び生き返らせてはもらえませんか」

土地神は眉をきゅっとしかめて考えてしまった。金春発は皇帝と自称したし、彼自身もとても皇帝に似ているので、彼の命令を聞かないわけにはいかなかった。実際に、金春発は確かに皇帝のようにいいものを食べ、立派な住まいに住み、彼の生活に口出しできる人は一人もいない。それにいつでも美女たちが彼を取り囲んで世話している。まるで三宮六院の大勢の後妃を持っている皇帝様のような。彼の父が出棺する時には、彼はたくさんの女性を雇い、わざわざ肌の露出度が高い格好でお墓に泣きに来てもらった。

その時、彼をみっともないと批判する人もいたが、彼を羨ましがっている人もいた。中には彼は一族の面目をよく立てたと称賛する人さえも出てきた。

土地神はまた眉をしかめた。今の世の中には金春発のようなニセ皇帝が実に多すぎる。そのようなニセ皇帝たちはよく土地神に煩わしく面倒な事を押し付けてくるので、大変忙しくて猫の手も借りたいほどだ。特に今回の頼みはかなり難しい仕事なので、土地神自らが表に立ってやらなければならない。

夜中になって、土地神は自らの象徴である赤い灯籠を提げて、金春発に一口だけ食べられた皇帝魚を連れて河辺に来た。

「海の魚、蝦の兵卒、皆私の命令を聞け！」

あつと言う間に、水辺には大勢の魚、蝦の兵卒が集まってきた。

「お前たちにこの皇帝魚を連れて帰るよう命じる！」

土地神はそう言って、皇帝魚の鼻孔に一口の息を吹き込んだ。すると皇帝魚はすぐに目を開き、ひれと尻尾も揺れ、唇もぶんと動き出した。皇帝魚は生き返って、土地神に向ってお辞儀をしてお礼を言って、海の魚、蝦の兵卒に従って、喜び勇んで何回も身を翻して河底の故郷に帰った。

しかし、皇帝魚は故郷に帰ってからあることに気が付いた。自分があまり醜いので種族の皆に嘲笑われている。肩の上の肉が一箇所なくなって、その部分の色はその他の部位と完全に異なっていた。

皇帝魚の色は、もともと褐色だった。しかしその色は、棲む砂地の色に従って変化した。砂の色が少し濃くなれば、皇帝魚の色も少し濃くなり、砂の色が少し薄くなれば、それなりに少し薄くなる。淡水河の砂は黒いので、皇帝魚の色は黒色に近い暗い褐色に成り変わった。しかしこの皇帝魚は、金春発に食べられてしまった部位が一箇所、白色の傷跡として残ってしまっていた。

この皇帝魚は同族の皇帝魚にあざ笑われるのに対して、皆の腹部もすべて俺のあそこと同じ白色じゃないかと負けずに反発した。彼が言うとおりの、同族の皇帝魚たちは皆違わず二種類の色がついていた。

しかし、皆口をそろえて皇帝魚は表裏両側に違う二種類の色が

ついているが、背部はすべて褐色で、腹部は全部白色でしかないと  
言った。

この皇帝魚のもう一つの悲劇は、あの一口の傷跡の色が隠れて  
いる砂の色と違うことだ。皇帝魚が「鰯沙魚」と呼ばれるのは、  
河底の砂の中に隠れ棲む習性から名づけられたとも考えられる。  
この皇帝魚は体を揺れ動かして、河底の砂の中に潜り込んで、た  
だ背中的一部分と目だけを出している。背中と砂の色が似通って  
いるため、保護色となっている。それは敵の攻撃を逃れることが  
できる一方、偽装して身の回りを泳ぎ通る小さな魚や蝦を捕食す  
るには役立っている。しかし背中に傷跡が残っている以上、完全  
に身を隠しきれなくなった。

この皇帝魚の最大の悲劇は、産卵する季節に起きた。自分と同  
じ醜い子孫を残したくないという思いから、皇帝魚は卵を産むと  
その卵をひとつひとつ食べてしまった。

しかし、産む卵の数が実に多いのと、河の水がひっきりなしに  
流動しているために、食べ尽くす方法がなかった。そうして生き  
延びた一部の卵はやがて小さな魚に孵化した。そうすると皇帝魚  
はいっそう焦った。醜い稚魚たちを成長させる気はまったくなく  
し、稚魚らを自分と同じような不幸な目に遭わせてはいけな  
いと思った。

全ての魚は自分の子孫がより多く成長することを望んでいる  
ものだが、この皇帝魚は仕方なく自分の稚魚を食べなければなら  
なかった。その気持ちはとても辛いものだった。更に不幸な事に  
この皇帝魚は自分の稚魚を食べているうちに誤って他の魚たちの  
稚魚も食べてしまったため、抗議が殺到したのだ。もともと皇帝  
魚が成魚になった後は目が体の片方、つまり体の背部の一ヶ所に  
集中しているので簡単に他の魚と見分けがつくのだが、孵化した  
ばかりの稚魚の目は他の稚魚と同じで目が体の両側について、  
それは成長するにつれて徐々に背部の片側に移る。だから、稚魚  
は他と見分けがつきにくいのだ。この皇帝魚が誤って他の稚魚を

食べてしまったのはこのためだ。

この皇帝魚は自分の醜くて不幸な子孫を食べ尽くす術がもうないと分かっているのに、口を歪めて泣き始めた。皇帝魚の口はほかの魚と違いもともと歪曲なのだが、泣きだすと口がもっと歪んで更に醜くなってしまった。

この皇帝魚は泣いてはいけなさと自分に言い聞かせるが、とても悲しいので涙はやはり止めどなく流れた。しかし次々と溢れる涙は河の水が洗い流した。魚が涙を流すことはないと言われるが、この皇帝魚は自分の涙が河の水の中に流れ込んだと信じて疑わない。淡水河の水はこの皇帝魚の涙なのだ。昼夜絶え間なく流れゆく河の水はこの皇帝魚の涙なのだ。

【鄭清文著「皇帝魚的二次災厄」（台湾『幼獅文芸』1993年）初出。  
「皇帝魚的二次災厄」（『鄭清文短編小説全集』巻6《白色時代》、台北市・麥田出版、城邦文化發行、1998年。ISBN 957-708-602-0）に拠った】

#### 作者紹介：

鄭清文は一九三二年生まれ、台湾台北人、台湾大学商業学科卒業、華南銀行に四十何年間勤務し、定年退職し、現在は執筆活動に専念している。主な作品は短編小説で、すでに『巔蕪谷』、『最後の紳士』、『相思子の花』、『鄭清文短編小説全集』などを出版した。長編小説『峽地』、『大火』のほか、童話集『燕心果』及び長編童話『天燈・母親』も出版した。呉三連賞、時報文学賞推薦賞を受賞したほか、『三本足の馬』の英訳本でアメリカ「桐山環太平洋書巻賞」を獲得した。

#### 訳者紹介：

頼振南は一九六〇年生まれ、台湾台南人、輔仁大学東方語文学科卒業、日本国立東北大学に六年間留学、現在は輔仁大学日本語文学科の副教授兼学科主任である。専門は日本王朝物語文学、日本近・現代文学と日中翻訳である。多くの学術研究論文を発表したほか、日本古典文学の『竹取物語』、妹尾河童著『少年H』、永井隆著『いとし子よ』、『この子を残して』、『長崎の鐘』、浅田次郎著『鉄道員』なども翻訳し、台湾で出版した。